短 報

友人関係の形成初期場面における
動機づけと親和傾向、感情との関連¹

—自己決定理論の枠組みから—

岡田 涼 日本障害者リハビリテーション協会・中京大学現代社会学部²
中山留美子 三重大学高等教育創造開発センターMotivation, affiliation tendency, and affect in early stages of friendship:
Self-determination theoryRyo Okada (*Japanese Society for Rehabilitation of Persons with Disabilities/
School of Contemporary Sociology, Chukyo University*)Rumiko Nakayama (*Higher Education Development Center, Mie University*)

The purpose of this study was to reveal the role of friendship motivation in early stages of friendship. We examined the relationships between friendship motivation and affiliation tendencies and affect in dyadic interactions with unacquainted partners. Thirty-eight university students participated in the study. The participants were paired with a same-sex unacquainted partner and were observed in a dyadic interaction situation. The indices of affiliation tendencies were looking, smiling, and willingness to engage in future interaction with partners. The results showed that autonomous motivation was positively related to looking and willingness to engage in future interaction. Controlled motivation was positively related to negative affect before interaction. The effect of autonomous motivation on friendship formation is discussed.

Key words: friendship motivation, affiliation tendency, friendship formation, dyadic interaction

友人関係が形成されるプロセスでは、動機づけが重要な役割を果たしている。友人関係場面における動機づけを捉える1つの理論として、自己決定理論 (self-determination theory: Deci & Ryan, 2000) がある。自己決定理論では、自律性の次元に沿って、外的調整、取り入れの調整、同一化的調整、内発的動機づけという複数の動機づけ概念を提唱している。外的調整は、外的報酬や相手からの働きかけによって友人と関わろうとする動機づけである。取り入れの調整は、自尊心を保ち、不安や恥ずかしさを低減するために友人と関わろうとする動機づけである。同一化的調整は、関

係に個人的な価値や重要性を見出して友人と関わろうとする動機づけである。内発的動機づけは、相手に対する興味や楽しさから友人と関わろうとする動機づけである。実証研究では、同一化的調整と内発的動機づけからなる自律的動機づけと、外的調整と取り入れの調整からなる統制的動機づけという2つの高次因子が見出されることが多い (Gore & Cross, 2006; 岡田, 2009)。この2つの因子は、興味や重要性から自律的に友人と関わろうとする感覚をもつか、他者の働きかけや不安などから外的・内的に統制されている感覚をもつかの違いを反映している。

友人関係場面において、動機づけは様々な行動や感情と関連することが示されている。同一化的調整や内発的動機づけなどの自律的動機づけは、自己開示や向社会的行動 (岡田, 2008)、社会的コンピテンス (Soenens & Vansteenkiste, 2005)、友人からの好意評定 (Richard & Schneider, 2005) を予測することが

Correspondence concerning this article should be sent to: Ryo Okada, School of Education, Nagoya University, Furo-cho, Chikusaku, Nagoya, 464-8601, Japan (e-mail: ryooo@r4.dion.ne.jp)

¹ 実験に参加して下さった皆様に厚くお礼申し上げます。また、有益なご指摘を下さいました査読者の先生方に感謝致します。

² 現所属：名古屋大学教育学部 (非常勤講師)

明らかにされている。これらの研究は、自律的動機づけが友人に対する積極的な働きかけを促すことによって、ポジティブな友人関係の形成に影響することを示唆するものである。

一方、友人関係の初期場面に注目して自律的動機づけと統制的動機づけの影響を検討した研究はみられない。友人関係の形成過程は、お互いに未知の他者である状態から、相互作用を繰り返すことで次第に親密になっていくプロセスであると考えられる。友人関係の初期分化に関する研究では、関係初期の相互作用が後の親密化を予測する重要な要因であることが示されている (Berg, 1984; 山中, 1994)。そのため、友人関係場面における動機づけの役割を明らかにするためには、関係形成の初期場面における相互作用と自律的動機づけおよび統制的動機づけとの関連を明らかにすることが不可欠である。

本研究では、自律的動機づけと統制的動機づけが友人関係の形成初期場面における親和傾向と感情に及ぼす影響を検討する。友人関係初期の疑似的状況として、実験室における未知の他者との相互作用場面を設定する。実験室において他者と相互作用的に関わる場面は、友人となり得る他者との初対面の状況と類似したものとなり得る。例えば、大学での講義や部活などで友人と知り合い、次第に関係を深めていくプロセスを考えた場合、その最初期にはお互いに未知の状態で何かしらの課題や環境を共有する場面があると考えられる。友人関係初期の疑似的状況を作り出すことで、実際の行動や感情を即時的かつ直接的に測定できる。また、友人関係初期の疑似的状況を作り出すことには、環境的要因を統制することで動機づけの効果を見出しやすくなるという利点もある。

動機づけと関連する要因として、相手に対する親和傾向と相互作用中の感情に注目する。初対面の他者との相互作用において、親和傾向を示し、ポジティブな感情を経験することは、後の関係の親密化に促進的な影響を及ぼすと考えられる。そのため、動機づけと親和傾向および感情との関連を明らかにすることは有意義であると考えられる。親和傾向に関するいくつかの研究では、実験参加者が他者と一緒に待たされる時間中に示す親和的な行動に注目している (Kulik & Mahler, 2000)。例えば、Gump & Kulik (1997) は、相互作用の相手に対する注視と笑顔を親和傾向の指標としている。本研究でも同様に、注視と笑顔という2つの行動を親和傾向の指標とする。加えて、本人が主観的に関係の継続を望んでいる程度も親和傾向の指標として測定する。感情については、相互作用中の自己報告によるポジティブ感情とネガティブ感情を測定する。

本研究の仮説は以下の通りである。先行研究では、自律的動機づけが友人に対する積極的な働きかけを促

すことが示されている (岡田, 2008)。そのため、自律的動機づけは、相互作用の相手に対する親和傾向を促すことが予想される。一方、統制的動機づけは、先行研究において友人に対する働きかけと明確な関連がみられていないため、本研究でも親和傾向とは関連しないと考えられる。感情との関連について、自律的動機づけの高い者は、友人との関わりに興味や重要性を感じているため、友人となり得る他者との相互作用を肯定的に捉えやすいと考えられる。統制的動機づけの高い者は、不安やプレッシャーを感じることで友人と関わろうとするために、未知の他者との相互作用を否定的に捉えやすいと考えられる。そのため、自律的動機づけは相互作用中のポジティブ感情と関連し、統制的動機づけは相互作用中のネガティブ感情と関連することが予想される。

方 法

参加者

大学生40名が実験に参加した。参加依頼は著者の知人を介して行った。学部、学年、性別、部活動などの事前情報をもとに、お互いに未知の同性ペア20組を構成した。質問紙の回答に不備のみられた1組を除き、38名 (女性32名、男性6名) を分析対象とした。

手続き

ペアの2名の参加者が実験室に到着すると、実験者 (著者) が実験内容を説明した。カバーストーリーとして、実験の目的は推論課題の解決プロセスを調べることであったと説明した。分析のために実験の様子を実験室に備え付けのビデオで録画してもよいかどうかを尋ね、すべての参加者が同意した。まず現在の感情を評定するように求めた。続いて課題の説明を行った。課題は、5人の人物について、いくつかの手掛かり (“髪をたばねていない2人は隣り合っていませんでした” など) をもとに席順を考える推論課題であり、10分間2人で協力して取り組むように告げた。この課題は、参加者が相手との相互作用に慣れるためのアイスブレーキングとして導入した。課題に取り組んだ後、フィルターとして課題に対する興味などの質問項目への回答を求めた。その後、質問紙の結果集計のためと称して実験者は実験室を去り、参加者を実験室に残した (5分間)。その際、しばらく実験室で待つように告げ、何をしていてもよいことを伝えた。この待ち時間中の参加者の行動をビデオによる録画映像を用いてコーディングした。5分後、実験者は実験室に戻って待たせたことを詫言、最後の質問紙に回答してもらった。回答の際、片方の参加者には別の実験室に移動してもらい、2人の参加者は別々の部屋で回答した。質問紙は、①待ち時間中の感情、②関係継続の意欲、③動機

づけ、から構成されていた。質問紙の回答後にデブリーフィングを行い、謝礼（文具）を手渡して実験を終了した。デブリーフィング時に、ペアの相手と初対面であったこと、実験が極端に不快なものではなかったことを確認した。

親和傾向の行動指標

親和傾向の行動指標として、Gump & Kulik (1997) で用いられた注視と笑顔を設定した。注視は“相手の顔や身体に対して視線もしくは顔を向ける行動”であり、笑顔は“相手の発言や行動に対して発声を伴わない笑顔で応じる行動”である。この2つについて、2名の評定者が独立にすべての参加者をタイムサンプリング法で評定した。10秒単位で各行動がみられたか否かを評定した。1単位となる10秒中に行動が生じた時間や回数は区別せず、各行動が生じたか否かという点からコーディングを行った。一致率としてカッパ係数を算出したところ、その平均は、注視が.96 ($SD = .05$)、笑顔が.92 ($SD = .05$) であり、高い一致率が確認されたため、片方の評定者の評定を用いた。5分間（300秒）における生起回数を各行動の得点とした。10秒を単位とするため、得点範囲は0から30となる。

質問紙

感情 Positive and Negative Affect Schedule (PANAS: Watson, Clark, & Tellegen, 1988) の日本語版（佐藤・安田, 2001）を用いた。PANAS日本語版は、実験状況での感情状態を測定する尺度であり、ネガティブ感情（NA：“心配した”“いらだった”など8項目）とポジティブ感情（PA：“活気のある”“わくわくした”など8項目）の2下位尺度からなる。相互作用前については、“今のあなたの気持ちについてお尋ねします。次のようなことを、今現在どの程度感じていますか”と教示し、待ち時間中については、“実験者が席を外し、パートナーと2人になったときのあなたの気持ちについてお尋ねします。次のようなことを、どの程度感じましたか”と教示し、“1：まったくあてはまらない”から“6：非常によくあてはまる”の6件法で回答を求めた。

関係継続の意欲 行動指標に加えて、ペアの相手との関係継続を望む程度を親和傾向の指標とした。尺度項目はCoyne (1976) のWillingness to Engage in Future Interaction Scaleをもとに作成した（“パートナーとゆっくり話をしてみたい”“パートナーとは仲良くなれないと思う（逆転項目）”など8項目）。回答方法は“1：まったくあてはまらない”から“6：非常によくあてはまる”の6件法であった。

動機づけ 岡田 (2005) の友人関係への動機づけ尺度を用いた。この尺度は、全般的な友人関係につい

て、友人と親しくしたり、友人に働きかける理由を尋ねるものであり、外的調整（“親しくしていないと、友人ががっかりするから”など4項目）、取り入的調整（“友人がいないのは恥ずかしいことだから”など4項目）、同一化的調整（“友人といることで幸せになれるから”など4項目）、内発的動機づけ（“友人と親しくするのはうれしいことだから”など4項目）の4下位尺度からなる。回答方法は“1：あてはまらない”から“5：あてはまる”の5件法であった。

結 果

尺度構成

PANAS日本語版について、下位尺度ごとの α 係数を算出した。相互作用前のNAが.74, PAが.83, 待ち時間中のNAが.78, PAが.80と一定の信頼性を有することが示されたため、それぞれ項目の合計得点を算出した。また、関係継続の意欲について、8項目に対して主成分分析を行ったところ、第1主成分の分散説明率は61.13%であり、負荷量の絶対値はすべて.6以上であった。そのため、8項目の合計得点を関係継続意欲とした（ $\alpha = .91$ ）。

動機づけについて、下位尺度ごとに α 係数を算出したところ、外的調整が.46, 取り入的調整が.73, 同一化的調整が.77, 内発的動機づけが.75であった。外的調整は、I-T相関の低い1項目を削除したところ $\alpha = .72$ となり、各下位尺度で一定の信頼性が示されたため、それぞれ項目の加算平均を算出した。本研究では、同一化的調整と内発的動機づけの合計を自律的動機づけ、外的調整と取り入的調整の合計を統制的動機づけ得点として扱うこととした。この得点化の方法は、動機づけの上位概念を捉える指標として多くの研究で用いられており（岡田, 2009; Shahar, Henrich, Blatt, Ryan, & Little, 2003）、動機づけの自律性を重視する自己決定理論の主張を検証するうえで有効となる。4下位尺度得点に対して因子分析（主因子法）を行ったところ、固有値1以上の2因子が抽出され、第1因子には内発的動機づけと同一化的調整の負荷が大きく、第2因子には外的調整と取り入的調整の負荷量が大きかった（Table 1）。各変数の記述統

Table 1
動機づけの下位尺度に対する因子分析結果
（プロマックス回転後）

	F1	F2
内発的動機づけ	.81	-.14
同一化的調整	.73	.20
外的調整	-.10	.75
取り入的調整	.17	.59
因子間相関		-.21

Table 2
各変数の記述統計量

	Mean	SD
親和傾向		
注視	8.11	9.42
笑顔	12.92	7.73
関係継続意欲	35.74	5.28
動機づけ		
自律的動機づけ	9.14	0.76
統制的動機づけ	4.98	1.21
感情		
相互作用前 NA	20.16	4.43
相互作用前 PA	21.16	4.97
待ち時間中 NA	20.00	5.18
待ち時間中 PA	19.92	5.01

計量を Table 2 に示す。

動機づけと親和傾向との関連

本研究のデータはペアデータであるため、状態レベルの変数にはペア内の類似性がみられる可能性がある。ペア内の類似性を検討するため、Kenny & La Voie (1985) に従い、注視と笑顔の級内相関係数を求めたところ、いずれも有意であった（注視： $r = .98, p < .01$ 、笑顔： $r = .92, p < .01$ ）。そのため、Kenny & La Voie (1985) の方法を用いて、ペア内の類似性の効果を統制したうえで個人レベルの相関係数を求めた（Table 3）。自律的動機づけは注視と有意な正の相関を示したが（ $r = .53, p < .05$ ）、笑顔とは有意な相関を示さなかった（ $r = -.24, n.s.$ ）。統制的動機づけは注視、笑顔のいずれとも有意な相関を示さなかった（ $r = .23, .30, n.s.$ ）。自律的動機づけと笑顔との関連以外は仮説を支持する結果であった。

関係継続意欲の級内相関係数は有意ではなかったため（ $r = .07, n.s.$ ）、個人を単位として相関係数を算出した（Table 3）。仮説と合致し、自律的動機づけは有意な正の相関を示したが（ $r = .45, p < .01$ ）、統制的動機づけは有意な相関を示さなかった（ $r = -.18, n.s.$ ）。また、待ち時間中の NA が関係継続意欲と負の相関を示したため³（ $r = -.31, p < .10$ ）、階層的重帰帰分析によって待ち時間中の感情の効果を統制したうえで動機づけの効果を検討した。関係継続意欲に対して、ステップ1で待ち時間中の NA と PA を投入したところ、説明率は有意ではなかったが（ $R^2 = .11, n.s.$ ）、NA が有意な関連を示した（ $\beta = -.33, p < .05$ ）。

³ PANAS 日本語版の級内相関係数は、相互作用前の NA と PA（ $r = .12, -.38, n.s.$ ）、待ち時間中の NA と PA（ $r = -.28, .17, n.s.$ ）のいずれも有意ではなかったため、個人を単位として相関係数を算出した。

ステップ2で自律的動機づけと統制的動機づけを投入したところ、説明率の増分が有意であり（ $\Delta R^2 = .18, p < .05$ ）、自律的動機づけが有意な関連を示し（ $\beta = .44, p < .01$ ）、待ち時間中の NA の関連は有意ではなかった（ $\beta = -.22, n.s.$ ）。

動機づけと感情との関連

動機づけと PANAS 日本語版との相関係数を算出した（Table 3）。相互作用前について、自律的動機づけは NA、PA のいずれとも有意な相関を示さなかった（ $r = -.01, .05, n.s.$ ）。統制的動機づけは NA と有意な正の相関を示したが（ $r = .56, p < .001$ ）、PA とは有意な相関を示さなかった（ $r = .06, n.s.$ ）。待ち時間中について、自律的動機づけは NA（ $r = -.20, n.s.$ ）、PA（ $r = -.08, n.s.$ ）のいずれとも有意な相関を示さず、統制的動機づけも NA（ $r = .22, n.s.$ ）、PA（ $r = .20, n.s.$ ）のいずれとも有意な相関を示さなかったため、仮説は支持されなかった。

考 察

本研究では、友人関係初期の疑似状況として実験室での相互作用場面を設定し、動機づけと親和傾向、感情との関連を検討した。自律的動機づけは相手に対する注視および関係継続の意欲と関連した。親和傾向の指標として用いた注視は、相手に対する興味を反映するものと考えられる。そのため、興味や重要性によって友人と関わろうとする動機づけをもつ者は、未知の他者と相互作用を行う場面でも、相手に対する興味を示し、さらに関わりをもちたいと望む傾向があると考えられる。この結果は、友人関係の初期において自律的動機づけが相手に対する親和傾向を促すことを示唆するものである。しかし、自律的動機づけと笑顔との関連はみられなかった。これについては、本研究での笑顔に複数の異なるタイプの笑顔が含まれていた可能性がある。Heerey & Kring (2007) は、喜びを伴う笑顔（pleasant smile）と愛想笑い（polite smile）とを区別し、愛想笑いは社会不安の高い者に多くみられることを示している。本研究での笑顔にも、親和傾向を示す笑顔だけでなく、愛想笑いに相当するものが含まれていたために、自律的動機づけとの関連が見出されなかったと考えられる。

感情との関連について、自律的動機づけと統制的動機づけのいずれも待ち時間中の感情とは有意な相関を示さず、仮説は支持されなかった。この理由としては、測定した感情に相互作用以外の要因から生じる感情が含まれていたことが考えられる。待ち時間中の感情を測定する際の教示として、“パートナーと2人になったときの気持ち”を尋ねた。この教示が指す感情には、相互作用に対する感情に加えて、実験室で待たされることや課題に対する感情が含まれていた可能性

Table 3
動機づけと親和傾向、感情との相関係数

	親和傾向			感情			
	注視	笑顔	関係継続 意欲	相互作用前		待ち時間中	
				NA	PA	NA	PA
自律的動機づけ	.53*	-.24	.45**	-.01	.05	-.20	-.08
統制的動機づけ	.23	.30	-.18	.56***	.06	.22	.20

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

があり、感情の対象を特定しなかったために、動機づけと感情との関連が見出せなかったと考えられる。一方、統制的動機づけと相互作用前のネガティブ感情との間に関連がみられた。相互作用前の感情については“今の気持ち”を尋ねたため、実験に参加することに対する感情や未知の他者と相互作用を行うことに対する感情などが含まれていたと思われる。統制的動機づけの高い者は不安や他者からの働きかけによって統制されている感覚をもつため（岡田，2009），未知の他者と相互作用を行うことに焦点をあてやすく、相手と関わらなければいけないという感覚を生じたり、相手からの評価を懸念して不安が高まることで、ネガティブ感情を感じやすかったのであると考えられる。

これまでの研究では、自律的動機づけが友人に対する積極的な働きかけを促すことで、親密な関係の形成に影響することが示されていた（岡田，2008）。本研究の結果は、友人関係の初期においても自律的動機づけが重要な役割を果たしている可能性を示唆するものである。これまでの研究で、関係初期の相互作用が重要であることが示されているが（Berg, 1984；山中, 1994），自律的動機づけは、友人となり得る面識の浅い他者に対する親和傾向を高めることで、関係の初期からすでに友人関係の形成に影響力をもっていると考えられる。

本研究の限界として、実験室における相互作用を設定することによって、相手に対する認知を操作してしまった可能性が考えられる。心理学実験の一環という枠組みがあることによって、参加者は相互作用の相手を“友人となり得る他者”ではないと認知したかもしれない。日常の友人関係では、必ずしも出会った他者が友人となり得るかどうかを判断したうえで関わっているわけではない。自分との今後の関係についての認知を特に形成することなく、相互作用を通じて自然に親密になっていくことが多いと思われる。このような相手に対する認知の違いがあるとすれば、本研究の結果を実際の友人関係の初期場面にあてはめて考えることは難しくなる。今後、実際の友人関係の初期場面において本研究の知見を確認することが必要である。また、本研究の対象者数は少なく、大部分が女性である

ため、サンプル数を増やして本研究の知見を追認することが求められる。加えて、今回は同性のペアのみを対象としたため、本研究の知見が適用されるのは、同性の他者との関係のみであり、異性の他者との関係についてはさらなる検討が必要である。

引用文献

- Berg, J. H. (1984). The development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, **46**, 346-356.
- Coyne, J. C. (1976). Depression and the response of others. *Journal of Abnormal Psychology*, **85**, 186-193.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, **11**, 227-268.
- Gore, J. S., & Cross, S. E. (2006). Pursuing goals for us: Relationally autonomous reasons in long-term goal pursuit. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 848-861.
- Gump, B. B., & Kulik, J. A. (1997). Stress, affiliation, and emotional contagion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 305-319.
- Heerey, E. A., & Kring, A. M. (2007). Interpersonal consequences of social anxiety. *Journal of Abnormal Psychology*, **116**, 125-134.
- Kenny, D. A., & La Voie, L. (1985). Separating individual and group effects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **48**, 339-348.
- Kulik, J. A., & Mahler, H. I. M. (2000). Social comparison, affiliation, and emotional contagion under threat. In J. Suls & L. Wheeler (Eds.), *Handbook of social comparison: Theory and research*. New York: Kluwer Academic/Plenum Publisher. pp. 295-320.
- 岡田 涼 (2005). 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討—自己決定理論の枠組みから パーソナリティ研究, **14**, 101-112.
- 岡田 涼 (2008). 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 岡田 涼 (2009). 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合

- パーソナリティ研究, **18**, 152-160.
- Richard, J. F., & Schneider, B. H. (2005). Assessing friendship motivation during preadolescence and early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, **25**, 367-385.
- 佐藤 徳・安田朝子 (2001). 日本語版PANASの作成 性格心理学研究, **9**, 138-139.
- Shahar, G., Henrich, C. C., Blatt, S. J., Ryan, R., & Little, T. D. (2003). Interpersonal relatedness, self-definition, and their motivational orientation during adolescence: A theoretical and empirical integration. *Developmental Psychology*, **39**, 470-483.
- Soenens, B., & Vansteenkiste, M. (2005). Antecedents and outcomes of self-determination in 3 life domains: The role of parents' and teachers' autonomy support. *Journal of Youth and Adolescence*, **34**, 589-604.
- Watson, P. J., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.
- (2010年12月7日受稿, 2011年3月2日受理)